

二〇二二年二月三日

冬雷と思ふや否や震度四
竹さやぐたび山茶花の紅見ゆる
吹き抜きの庭貫きて大聖樹
暗闇の沖につんざく鯉起こし
鷗群る牡蠣打殻のボタ山に

二〇二二年二月二日

菓子を置く懐紙代はりに散紅葉
鷗尾 掴み 一声 二声 寒鴉
日向ぼこ明るき愚痴に大笑ひ

二〇二二年二月二日

菩提寺の藁を染めて黄落す
ぬくぬくの焼芋父の袂から
蒼天へみな万歳す冬木立
菊焚いて墓石に香手向けけり
遠近と鴨の水尾引く日の出時
冬日燦元禄と彫る寄墓に
弾むほど落葉の袋ぎゅう詰めに
寒風とおしくらをせし肩の凝
蚤の市買ふ気で値切る指輪かな

二〇二二年二月三〇日

鴟の贅めきて梢に軍手刺す
老い母にいつもの五年日記買ふ
あるなしの風に残りの紅葉散る
背中から魍魅も寄りくる焚火かな
あかつきにうちひろげたる氷魚網

千鶴
もとこ
智恵子
宏 虎
凡 士
む べ
もとこ
あひる
こすもす
はく子
満 天
智恵子
隆 松
ぼんこ
凡 士
たか子
なつき
豊 実
せいじ
明日香
素 秀
隆 松

枯葉馳す駅構内を急ぎ足

夕日背に麦踏む人の影法師影
耳遠き老い母と居て冬ぬくし

二〇二二年二月二九日

大枯木支ふ蒼天昼の月
柿とどく郷の夕陽を想ひけり
突と吹く風意地悪や落葉掃く
鈴生りの一枝お辞儀す実南天
石柱を虜としたる蔦紅葉
落葉道ふかふかを知る土踏まず
焼き芋の湯気もろともに頬張りぬ

二〇二二年二月二八日

灰と色残し四方山眠り初む
福耳がはみ出してをる冬帽子
仰向けになりて糶らるる松葉蟹
一燭を火点し待降節に入る

二〇二二年二月二七日

大根干す藁葺屋根の深庇
星一つ布の聖樹の天辺に
水輪いま不即不離なる二羽の鳩
四歳のマリヤ頑張れ聖夜劇

もとこ
みきお
あひる
せつ子
あひる
宏 虎
董 雨
ぼんこ
せいじ
はく子
満 天
もとこ
凡 士
む べ
かかし
む べ
豊 実
あひる

毎日句会みのる選・二〇二二年二月五日